



稲発酵粗飼料栽培におけるイネツトムシの防除適期

農業総合センター農業研究所

稲発酵粗飼料栽培におけるイネツトムシの防除適期は、水田に発生するイネツトムシの8～9割が若齢～中齢幼虫で、1枚～数枚の葉をつづった小さなツトが主に見られる、葉の食害がまだ軽微な時期です。

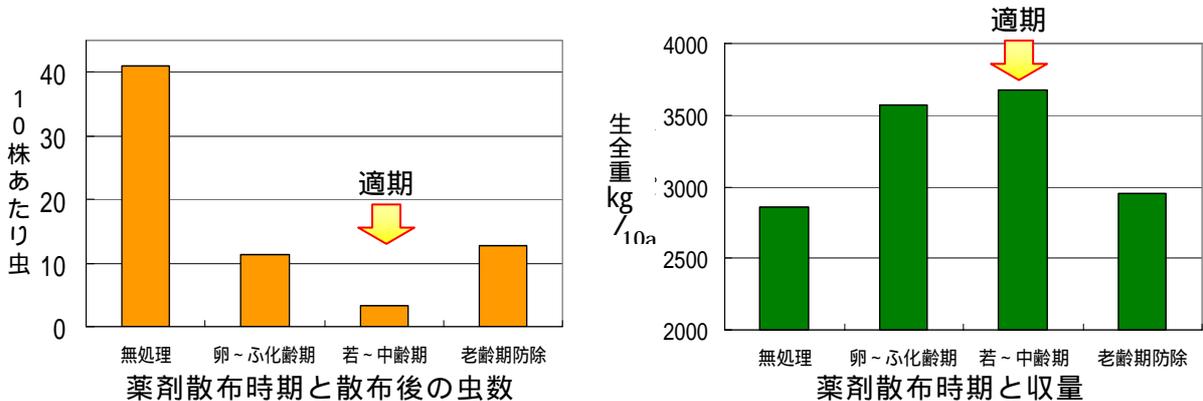
イネツトムシの発生と防除適期の判断

防除適期は『若～中齢期』ですが、イネツトムシの発生する時期は年により変動します。

7月～8月、食害が最も問題となるイネツトムシ第2世代幼虫の発生を、下図を参考に観察し、防除適期を逃さないことが大切です。

卵 ふ化期	<p>成虫(イチモンジセセリ)が水田を飛び回り、イネの葉に卵を産み付けます。</p> <p>ふ化直後のツト</p> <p>卵</p> <p>小さい卵を見つけるのは困難ですが、ふ化したばかりの幼虫がイネの葉先を折り曲げたツトをつくっているのが見られます。</p>
適期 若～中齢期	<p>若齢(体長約5mm)と中齢幼虫(体長約20mm)が大部分をしめる時期。</p> <p>1枚の葉の中央を巻いたツトや、数枚の葉をつづったツトが主に見られる。大きなツトも見え始めます。</p> <p>葉の食害は軽微。</p> <p style="border: 1px solid red; padding: 2px;">この時期が防除の適期</p>
老齢期	<p>老齢幼虫(体長 30～40 mm)が大部分をしめます。</p> <p>大きなツトが目立つ。</p> <p>すでに葉の食害が甚だしい。</p>

卵～ふ化期では、薬剤散布後も新たに幼虫がふ化する可能性があり、防除効果はやや劣ります。老齢期の薬剤散布では、すでに甚だしい食害を受けているため収量の回復は見込めません。



各時期にそれぞれカルタップ水溶剤(75%, 1500倍)を散布。品種クサホナミ。